しょうれんじ
青蓮寺

19 日(日)のみ

基本データ　住所：常陸太田市東連地町 200

公開時間	駐車場	写真撮影	スタンプ	トイレ	雨天時の展示物変更
15 時まで	○	○	○	○	なし

※　一部の文化財は、普段は公開しておりません。

解説動画 ※通信料がかかります

【文化財解説（青蓮寺)】江戸時代にホントにあった感動の親孝行物語を紹介します！

青蓮寺の来歴

青蓮寺は皇跡山極楽院と称する浄土真宗の寺院です。

この地には、親王であったころの天武天皇が天智 9 年（670）から 2 年ほど留まられ、帰還後に仏像や聖徳太子の像を安置したとの言い伝えがあります。その後五百余年を経て、周観上人が天台の法流を伝え、皇跡山極楽院瑞巌寺と称したとされます。

畠山重忠の第二子重秀は、父が殺された元久 2 年（1205）に出家して恵空と称しましたが、常陸に来た際に当山の太子堂に泊って太子の夢を見、そのお告げに感じて親鸞の弟子となり、法名を性証と改めました。

性証は建保 6 年（1218）に再訪の折、荒れ果てた境内を整え、堂宇を建てて浄土真宗の寺として住みました。その後に青い蓮の夢を見たことから、青蓮寺と改めたと伝えられています。

青蓮寺の指定文化財

○　**木造阿弥陀如来立像**（もくぞうあみだにょらいりゅうぞう）

県指定文化財（昭和 46 年 10 月 28 日指定）

青蓮寺の本尊である本像は、像高 53.5 ㎝、光背も含めると 102 ㎝、檜材の寄木造りの立像で、鎌倉時代後期の作（中染阿弥陀堂の鉄造阿弥陀如来立像とほぼ同時期）と考えられています。整った顔立ちや流麗な衣の線など、とても美しい像ですが、両手が手首から先が失われているため、元はどのような印相であったのか明らかになっていません（現在は後補）。

木造阿弥陀如来立像

○ **豊後国二孝女関係資料（17 点）　市指定文化財（平成 22 年 9 月 8 日指定）**

青蓮寺は「豊後国の二孝女」の舞台となった寺院でもあります。

文化元年（1804）３月、現在の大分県臼杵市の農民、河野初右衛門は、浄土真宗の開祖親鸞聖人の遺跡巡拝の旅に出発しました。

しかし、京都、越後、陸奥を遍歴するうちに持病が悪化してしまいます。そして、ついにここ青蓮寺の目の前で動けなくなってしまい、当時の住職や地元住民に面倒を見てもらうことになりました。

それから７年後の文化８年（1811）、親鸞聖人 550 回忌の折、京都西本願寺において、青蓮寺住職と初右衛門の菩提寺である臼杵の善正寺住職が出会います。そこで善正寺住職は、初右衛門が病臥、７年におよぶことを知りました。

知らせを聞いた初右衛門の娘つゆ と とき（当時 22 歳と 19 歳）は、道中の危険を承知で、父を迎えに行くことを決意します（つゆと ときの母親は、二人が幼いころに亡くなっていました）。

臼杵と青蓮寺の距離は約 300 里（約 1,200km）、当然、現在のように便利な交通手段もなく、移動は船や徒歩でした。何度も危険な目に遭いながらも、その都度親切な人と出会い、そして出発から４か月、ついに姉妹は父との再会を果たしました。

再開を果たす父と娘たち
（作：大内次男氏・大内和子氏・青蓮寺）

この親孝行のエピソードは村中に知れ渡り、村人たちに多くの感動をもたらしました。そしてさらに水戸藩にも届き、感銘を受けた藩主による水戸藩の全面協力と地元臼杵藩の援助を受けて、翌年、無事に臼杵に帰ることができたのでした。

この物語は、臼杵では代々語り継がれ、供養碑が建てられ、地元の小学校の校歌にまでなっています。一方の青蓮寺には、残念ながらこの物語は語り継がれていませんでしたが、平成 17 年春に、地域の研究者の手によってこれらの資料の存在が明らかとなり、各種の資料をまとめた「豊後国の二孝女」が豊後国の二孝女研究会によって発刊され、注目を浴びることとなりました。

現在では、県立高校の道徳の教科書にも採用されています。また、物語調に現代語訳した「実話 病父を尋ねて三百里 豊後国二孝女物語」も発刊されています。

平成 22 年、関係資料 17 点が市指定文化財になり、青蓮寺境内に顕彰碑が建てられました。なお、平成 23 年 5 月には「二孝女顕彰会」が発足し、二孝女の顕彰活動を推進しています。

集中曝涼 アンケートにご協力ください
こちらから回答可能です→
〔各公開場所の受付でも配布しています〕